

学修に何を求めるか

山高 博

立教大学は「専門性に立つ教養人」を育成するため、「専攻学問領域およびその他の知識の習得」、「知を検証・獲得・活用するために必要なスキルの習得」、「異なる価値観を持った人たちと協働してプロジェクトを遂行できる人材の育成」、および「様々な学習体験・社会体験ができる学習機会の提供」という4つの目的を掲げ、教育を実践する事を目指している。

「まねぶ」という言葉が示すように、学びは先人の残したものを身につけることから始まるが、学修の進展に伴って知識を知恵と創造力に昇華させるのが本来の学びである。

大学の4年間は短く、学ぶことは多い。社会に出る前に身につけておく事が望まれる基礎知識は膨大である。しかし、多くの基礎知識は専門書を読めば書いてあり、ネットを検索すれば出てきたりもする。膨大な知識の中には手に入れる方法さえ知っていれば済むものも多い。知識がなければ知恵も生まれない面はあるものの、高等教育で本来身につけるべきは知識の量ではなく、卒業しても必要となる能力、すなわち自ら知識を獲得する方法と得た知識を生かして目の前にある課題を解決する方法である。そのための教育法として、アクティブラーニング(AL)で総称される手法の有用性が認識されてきている。ALはただ座ってノートをとるだけの講義形態の授業と異なり、学生一人ひとりが課題を調べ、ピアディスカッションに参加し、成果をプレゼンテーションする能動型学修である。

立教には learning commons などのALの環境作りに配慮した新図書館も建設された。科目によって向き・不向きはあるが、ALは憶えるだけの授業になれた学生の意識を変える教育になりうる。ALでは限られた授業時間内で成果を出すために、授業時間外の学修時間が要求される。通常の講義科目では授業時間の2倍の自習時間を確保することで、授業内容が修得できると設定されているが、ALではさらに多くの学修時間が要求されるであろう。

一方で、ALというとグループディスカッションをリードできる、プレゼンテーションがうまくできる、積極的に自己表現ができるなどの側面に注意が向きがちであるが、自ら学ぶという意味からすれば、時間をかけて深く考える力も重要である。

冒頭に述べた本学の教育目標は、沈思黙考する学修習慣と能動的学修経験をバランスよく獲得することで、卒業後も学び続ける能力を身につけた学生を輩出することを表していると理解できる。学生が自ら学修時間を確保したくなるような、魅力ある授業を行うことが求められている。

やまたか ひろし

(本学理学部教授／

全学共通カリキュラム運営センター教育研究・広報委員／
総合教育科目構想・運営チームメンバー)